

歴史の息遣いを感じ、考える授業

社会史から考察する日本史学習

〇〇〇立〇〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇(日本史)

1 はじめに

生徒たちの過去に対する「感覚」「リアリティ」が薄らいできている。日本史の授業を行っていて、年々その思いは強くなってきていたが、ここ数年、その思いは加速度的に強くなってきている。思えば、生徒たちは、祖父母の代から昔の話を聞くことがほとんどなされなくなってきた世代である。昔話にしたところでメディアを通じたものであり、土地と結びついたおどろおどろしい話を聞く機会はなくなっている。そうした生徒の置かれている状況は歴史を担当している者にとってはとてもやっかいな事態に他ならない。過去に生きている者への共感が歴史の命だからである。

例えば、時代劇を一度も見たことのない生徒もあり、時代劇を枕とした授業展開も成立しにくくなっている。そのことは、授業を聞いていて頭の中に“仮説”としての歴史像を紡ぎ出せていないことを意味しているのではないだろうか。授業に出てくる歴史上の人物や民衆の姿は記憶すべき記号として認知されがちなものとなる。いわば肉体を持った生身の人間としては見てもらえなくなっているのが現状なのである。

このような状況で社会史的な視角を授業に取り入れていくということは重要な意味を持っている。ここで社会史とは、歴史をありありと感じるための様々な手だてというほどの意味で使用している。より豊かな歴史像を紡がせるためにはどうしたら社会史的なまなざしを授業の中に盛り込んでいくことができるのか。今回は、そのための一つの試みである。

2 実践環境

今回の報告は2校にまたがったものである。実践の前半は 高等学校、後半は 高等学校のものである。 高等学校での10年間、生徒と共に資料を見て、そこから何が見出せたかを出発点として授業を行ってきた。クラスの中には何人か、積極的に自分の意見を述べる者がいることが多く、そうした意見を核として共通認識を高めていくことをめざした。その結果、生徒達は資料を興味深く見る力と時代の雰囲気をつかまえる力を少しずつ培っていったのではないかと思う。

高等学校では、前任校での実践をふまえて、さらなる課題として生徒自身が自ら歴史の中に分け入って問いを発することができるようになることをめざした。ところが、生徒たちは資料を見たり読んだりして、そこから自分の意見を形成するという授業形態ははじめてのことであり、ゼロからのスタートとなったのである。自分の行ってきたことを改めて問い直しながら、少しずつ授業を進めていくこととなった。そういう状況の中での実践報告である。

3 研究目標

社会史的な教材を通じて生徒に身につけさせたい力として3点を設定した。まずは、図像資料などを見たときに資料にこめられているメッセージを受け取る感受性をもつことが出発点となる。次には、関心を持ったことをこのようなものが見つかったで終わらせず、諸分野の中で位置づけとする総合力を養うことに力点を置く。そして、最終的には、教員の設定した問いの枠から離れて、自分で問うことのできる力を養っていくことである。

(1) 豊かな歴史像をはぐませる

文字

切り取られた情報 = 概念知

屏風・絵巻物・写真

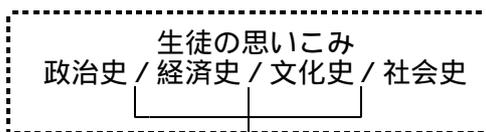
無限の情報

例：髪型、衣服、しぐさ、風景、「モノ」

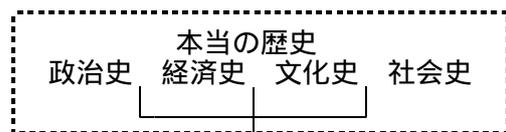
↓
興味の喚起

時代に対するイメージを膨らませるきっかけ
= 血の通った歴史像の構築

(2) 全体像をつかまえる力を養う



それぞれの分野は独立



相互に関連しあっている

どこを入り口にしても様々な分野を理解していくことができる

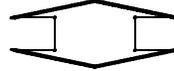
= さまざまな分野のつながりを考える中で全体像を構築していく

(3) 歴史に問いを発することができるようにする

生徒の思いこみ : 歴史 = 確定した事実の集積

⇔ 歴史学習 = 確定した事実のコピー ⇨ 暗記科目

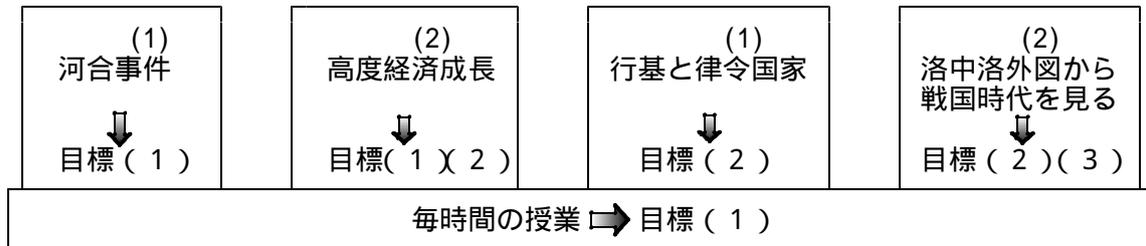
本当の歴史 : 歴史 = バラバラに存在している事実を並べてつなぎ合わせていく作業
 ⇒ つなぎ合わせるためには過去に問いかける必要
 ↓
 歴史とは発見するもの、驚きにみちたものとなる



学習指導要領との関わり

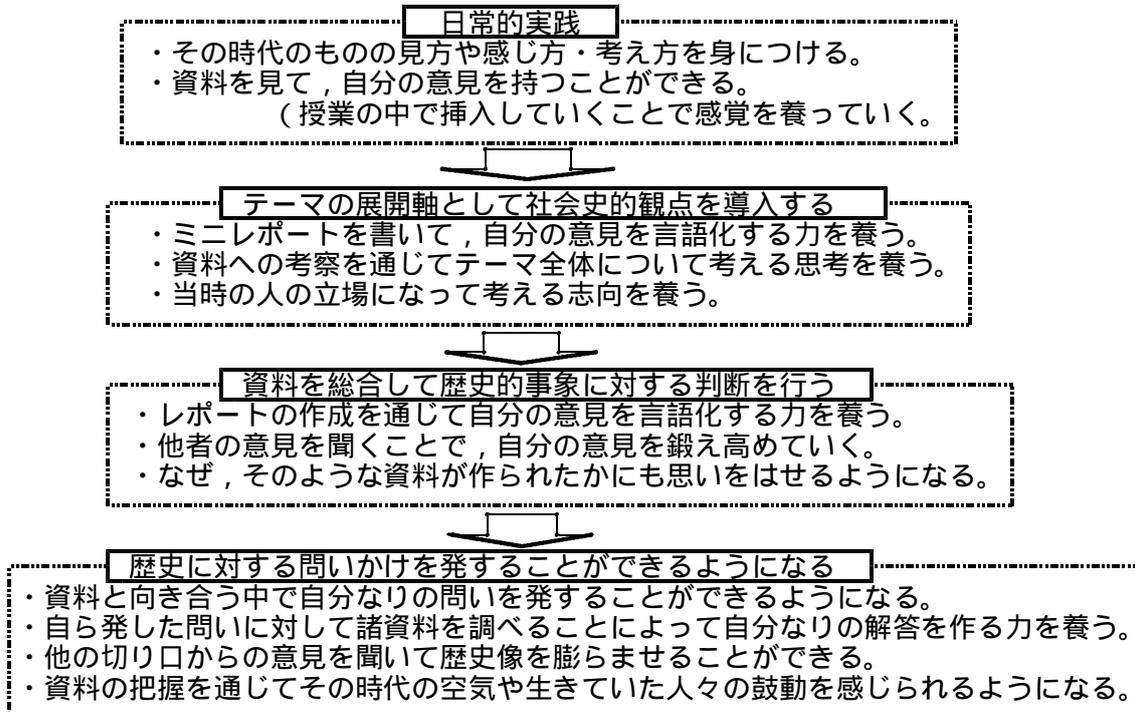
学習指導要領日本史Bの内容アの(ア)資料をよむには、「様々な歴史的資料の特性に着目して、資料に基づいて歴史が叙述されることを理解させる」とあり、「雑誌・新聞も含めた文献、絵画や地図、写真等の画像、映画や録音などの映像・音声資料、日常生活用品も含めた遺物や遺跡、景観、地名、習俗、伝承、言語など」の積極的な活用が謳われている。これは研究目標(1)と対応しているといつてよいであろう。豊かな歴史像を生徒に紡がせるためにありとあらゆる資料の活用が求められているのである。そして、研究目標(2)には「イ 歴史の追究」の方法の一例として述べられている「(ウ)政治的、経済的な条件や国際環境など時代背景とかかわらせてとらえること」が関連しているように思われる。「かかわり」を常に考えて歴史を見ていくことが全体像をつかまえるためには不可欠な行為だからである。研究目標(3)に対応しているのは「イ 歴史の追究 我が国の歴史の展開について時代ごとに区切らない主題を設定し追求する学習を通して、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」必要性を説いている箇所である。「主題」の設定とは歴史に対する疑問から生ずるはずであり、それはすなわち「問い」と同義だからである。

4 研究目標と授業実践の関わり



5 認識の深化のプロセス

先に提示した研究目標は、相互に関連しあっていて段階論的に把握することは難しい。そこで、認識の段階的な深化の一般モデルを提示しておく。



6 授業実践

近代史に社会史的観点を導入する
 【近代史での実践の必要性】

最近の日本史図説資料集はよくできている。めくるめくように図像資料がちりばめられ、可能な限り色彩豊かな歴史像を提供しようとの工夫が為されているからである。しかし、それは近世までのことで、近代になるとくすんだ白黒写真と目がちらちらするような細かな年表や統計によって、興味を持って読み進んでいきがたい雰囲気醸し出している。加えて、生徒たちの近代に対して抱いているイメージは、戦争と悲惨であり、それもまた近代史の実相に入るのを妨げているようである。近代についてはもっと肌触りのするような近代史の授業の構築が早急に求められている。

【実践校のカリキュラム】

日本史はすべて選択である。2年次において日本史B 3単位（近代史）、3年生で日本史A（昭和戦前史、戦後史、近代日本文化史）と日本史B（原始～近世）を履修することができるようになってきている。今回は3年次の日本史Aでの実践である。4クラス合同の選択のクラスであった。

【年間指導計画】

その時代の人々がどのようなものの見方や感じ方をしていたかを認識させるためには、トピックス的に特別に取り上げるだけでは、線香花火のように終わってしまう可能性が高い。そうした意味では観念や感性の次元で時代をつかまえさせるためには、毎時間の小さな実践こそが最も重要であるように思われる。1時間の中のどこで社会史的な視点を挿入するかは、その時間の授業を生き生きとしたものとするためにも大切なこととなってくる。そのことを明確化するために単元毎に使用資料・発問例を呈示した。

	内容	使用資料〔（ ）内は発問〕
1 学 期	第1章 昭和の戦争 昭和恐慌と人々の暮らし	宮沢賢治「雨ニモマケズ」「小作調停官」(この詩を読んでわからないところはあるか)娘身売りの漫画(なにが表現されているだろうか 写真で確認) 日常的実践の例 浜口内閣政策課題を示した漫画(絵をみて気づくことは何か)
	満州事変と軍国主義の進展	石原莞爾「世界最終戦争論」の一節(なにを言っているだろうか) / 満州の地について述べた新聞記事(当時の日本人にとって満州と呼ばれた中国東北部はどのように映っていたらう) / 五・一五事件時の農民決死隊記事(事件の背景をどのように推察することができるだろうか)
	軍国主義体制への傾斜	東アジア地図をにらむ近衛を描いた漫画(彼は一体なにをしようとしているのだろうか) / 軍事費が莫大なことに驚いている漫画(彼は一体なにに驚いているのだろうか) / 上海戦に参加した医師の日記(『我孫子市史近代編』)(実際の戦場はどのようなであったと言えるか)、兵士への慰問風景写真(兵士達はなぜ笑っているのだろうか)
	日米開戦から敗戦へ	日ソ不可侵条約漫画(握手している二人は誰) / けがをしているポパイの漫画(なにを表しているのだろうか) / リアルな東南アジアの風景(なぜこのようなリアルな絵が描かれたのだろうか) / 国防婦人会漫画(どんな女性像が浮かび上がってくるだろうか)
	反戦・反軍国主義思想の弾圧	授業実践(1)
2 学 期	第2章 戦後日本の軌跡 帝国日本の敗北	空襲関連資料(空襲を受けていた人々の気持ちはどうだったのだろうか、どうして空襲がおこなわれたのだろうか)
	占領と戦後改革	厚木飛行場に降り立つマッカーサーの写真(降りてきた写真を見てへんなところをさがそう) / ジープに群がる子供の写真(写真を見てどんなことを感じるか)
	政党政治の復活と経済の混迷	青空の下に立つ乞食の写真(写真を見て感じることは何か) / ホームルーム風景写真(写真を見て気づくことは何か) / 雑誌『真相』表紙(これからどんなことが言えるか)
	占領下の国民生活	DDT撒布写真(なにをしているところだろうか) / 戦後常識辞典、買い出し風景漫画(人々は生き延びるためにどんなことをしたのだろうか: 質問が先) / 山口判事餓死記事(あなたは山口判事の行った行動をどのように評価するのか)
	国際社会への復帰	講和会議をめぐる別れることとなった高校生カップルの文章 [亀裂の深さを説明するために使用]
	55年体制の確立	ゴジラの写真(吉田内閣を倒したものはなんだろうか) / 安保闘争写真(写真から気づくことはなにか)
	高度経済成長	授業実践(2)

	政治の混迷と経済の復活	瀕死の重傷の日本列島 [手塚治虫] 漫画 (なにを表現しようとしたのだろう 答えのサンプルとして海に黒い水が流れ込んでいる漫画) / 手狭な家を諷した漫画 (どうということが読みとれるか)
	第3章 近代日本の文化	
	明治期の文化	狩野芳崖「悲母観音」(この絵を見て気づくことは何か)
3	大正・昭和初期の文化	マヴォ「劇場の三科」の写真(何を表現しているかを考えてみよう)
学	昭和戦前期の文化	松本竣介の何枚かの絵(何を感じるか)
期		

【日常実践の例】

次のやりとりは「昭和恐慌」の出だしである。

T: (「雨ニモマケズ」を読み合わせた後に) この詩はだれのなんという詩なの?
 S: 宮沢賢治。「雨ニモマケズ」。
 T: なぜこんな詩が詠まれたんだろう。
 S: どんなときでも負けられないような強い心をもつように?
 T: では、この詩の中で意味のわからないところはどこだろう?
 S: 「サムサノナツハオロオロアルキ」ってなんで入れられているんだろう。
 T: なんでなの? 夏が寒くて困ってしまう人はだれだろう。
 S: 海関係の人?
 S: 農民?
 T: では、資料の絵を見てください(その1枚が右資料)。



(『東京パック』昭和4年10月 [『マンガイラスト昭和の歴史1』講談社])

宮沢賢治という既知の存在を入り口として当時のリアルな時代状況を認識することができる。生徒たちは、なぜ宮沢賢治は夏におおるおろしなくてはならないのかなどを考えることを通して当時の農村の置かれていた状況を把握していった。そして、マンガなどを通して、昭和恐慌のすさまじさを更に深く学んでいくことができたのである。

(1) 抽象的なテーマに社会史を盛り込む
 テーマ 「戦時下の思想弾圧」

1 限目

ア) 基礎理解

教科書を読んで思想弾圧の概略を把握させる。その時、誰がどんな理由で弾圧されたかに重点を置いてまとめさせる。わからないことについての質問を受ける。この時点での意見形成は、国家に弾圧された被害者という図式的な把握にとどまっているものが多い。

イ) 言葉の意味を確かめる

「弾圧」の語に改めて注目させる。発問は「弾圧というのが具体的にはどんなことをされたと思うか」というものである。まずあがってきたのが殺害、拷問といった答えであり、圧倒的多数が多くそれに類する意見であった。大学辞職や裁判で有罪になったという意外そうな反応を示す者が多かった。

ウ) 個々の事件についてエッセンスを解説する

2 限目

ア) 生徒の立場になって弾圧事件を考えさせる

大学教授の最もそばにいる生徒を通して、弾圧をとり巻く社会情勢の理解をめざした。クイズ形式で大学生の姿と進学率を予想させ、進学率について統計資料から計算させた。当時の授業内容も確認していくことで、大学生とは、驚くべきエリートであったことが判明し、戦前の社会構造の特質を確認させることとなった。それをふまえた上で弾圧に対する学生たちの反応を推定したが、官僚養成機関だったことや当時の時代状況から教授を救うために立ち上がったらしいとの意見が多数を占めた。そうした検討を通じて思想家たちの孤立ぶりを生徒たちは感じていったようである。

(統計資料や今和次郎の図像資料等をアレンジして作成した配布プリントの1枚)

イ) 河合事件を考える

ア) の分析を踏まえて河合事件を概観し、河合事件の特性を裁判での罪状を通じて確認する。そして、ミニ・レポートとして次のような課題を出した。

戦時が深まる中で自由主義を唱え続ける東京帝国大学経済学部教授河合栄治郎は、政府にいらまれていくようになっていきます。そうした状況を受けて大学側は河合を免職にしました。あなたは、自由を唱え続ける河合と大学側のどちらを支持しますか。当時の情勢を考慮に入れてあなただったらどうするかを考えて選択し、その理由を書いてください。
《どちらを支持?》 河合栄治郎 東京帝国大学

3 限目

ア) レポートを完成させる

最初の7分を自分の考えをまとめる時間とした。作成にあたっては、もし河合をやめさせるかどうかの会議に出席したと思って考えさせるように心がけさせた。当事者意識を持たせることでよりリアルな意見がつけられていくと考えたからである。作成後、挙手で意見を確認した。18名が大学支持、4名が河合支持、残りは態度保留との結果を得た。計38名のクラスであるにも拘らず、16名が態度保留である。当初の様相とは異なっており、生徒たちの思考に揺らぎが起こってきたことを示している。

イ) 意見表明

レポート作成後、生徒たちから意見表明をしてもらう。

生徒たちの意見から

(大学支持派)

・全国民が戦争を強要されている中で自由を唱えた河合の勇氣はいかなる時代においても正当化され、評価されるべきである。しかし、「大学」という団体の中では個人は一つの歯車にしか過ぎない。一個人のために全体が罰せられる事態も起こりうるのだ。東大が河合を免職にしなければ学校が封鎖されて勉強できないなど、東大の学生にも被害を及ぼす可能性が否めない。大学の対応は、河合という個人よりも団体を優先した結果と言える。

(河合支持派)

・国の言いなりになるのはいやだった。河合さんは自由主義だったから応援したいと思った。国の言うとおりにばかりしていたら、日中戦争だけでなく、また、次々に戦争が始まりそう。どうして河合さんが大学の教授を辞めなきゃいけないかわかりません……。悪いことをしたわけじゃないはず……。

ウ) 討論

大学支持派が圧倒的に多いとの結果は、実際にその場にいたらとの限定が生徒に大きなプレッシャーを与えたからだと思う。そのため、進行の仕方としては大学支持派から可能な限り大学側の正しさを発言させ、それを検討するという形で授業をすすめた。そうした議論を受けて思想・言論の自由の重要性を確認し、討論を終えた。

最後に河合がなぜ大学に迷惑のかかることを承知で自分の主張を守り通したかについて若干触れて終了した。

《実践の検証》

時代に身を置いて歴史事象を考えるという作業は、ある程度できた。当事者の立場に立って判断を下すロールプレイングの手法は、思ったより生徒の思考にゆらぎを与えることができた。その結果、思想家は善で国家は悪であるという図式が壊れ、どう考えたらよいのかとの思考が動き始めた。その過程で「自由はわがまま」に通じるとの認識が大勢を占めかけたが、空気に反しないことはやがて全体そのものを滅ぼしかねないのではないかと意見が出され、自由主義を改めて認識し得た。歴史事象を単なる概念知ではなく、血の通ったものとしてとらえる一つのきっかけとなりえたのではないかと考える。

(2) 多くの図像資料・文字資料を見て時代像をつくる

テーマ 「高度経済成長」

1 限目 資料観察

ア) イメージ作り

導入として、1950年代と1960年代の相違をイメージさせることとし、そのとっかかりとして現代の高校生にも通用するヒーローであるゴジラとウルトラマンを出してイメージ化をはかった。生徒たちには「ウルトラマンを見たときに効果的にするにはどんな技術が必要となるか、ゴジラと比較して考えてみよう」と投げかけてみた。ここから白黒・映画館/カラー・カラーテレビとの対比が容易になされた。60年代はカラーテレビが出現してきた時代と刻印されたのである。時代の比較を行うにあたって強烈なイメージを考える前提として持つことができた。

イ) 資料を配付し、それに基づいたレポートを作成する。

資料は 「僕は泣いちっち」(資料1:資料省略,以下同じ) 「こんにちわ赤ちゃん」(資料2) 50年代と60年代の典型的な家庭風景・風景の写真・イラスト(資料3)を

使用し、ミニレポートの作成にとりかからせた。考える内容は次のようなものである。

1. 資料1を見て、どんな光景を歌っているか考えよう。また、この歌が歌われた背景はどのようなものだったと思いますか。
2. 資料2を見て、どんな家庭が浮かび上がってきますか。
3. 暮らしのプリントを見て、50年代の暮らしと60年代の暮らしの違いをできるだけあげてください。また、その変化はどのような変化を引き起こすと思いますか。

ウ) 意見を発表しあう

2つの流行歌から見えてくることについて、暮らしの違いについて、という順番で自由に意見を発表させた。積極的に発言する者が何人もいたのでそうした者達の意見を核にできるだけ多くの者に意見を発表してもらい、2つの時代を浮き彫りにしていこうとした。発言内容は、核となった意見への付け加え、反対、疑問といった形で行った。ここではできるだけ発言がかたよらないように教員が調整機能を果たすことが必要となってくる。授業終了後、レポートを提出させた。

【レポートの一例】

1.
 - ・悲しみが満ちあふれている
 - ・地方から東京にたくさんの人がいった。仕事をもらうため。集団就職？
2.
 - ・幸せで平和な暮らしをしている家庭。
 - ・核家族
3.

暮らしの違い

 - ・電気、ガスがついて便利になった。
 - ・きれいになった。
 - ・イスや机を使う生活へと変わっていった。
 - ・電がなくなり、井戸から水道へと水を得る方法が変化した。
 - ・お風呂にトイレがついている＝アメリカ風になった。
 - ・大人数から少人数へ。

どんな変化を引き起こす

 - ・近代化し、便利になってくる。
 - ・清潔になって来た(土の風景からコンクリートの風景へ)
 - ・「欧米」化した！特に食べ物。
 - ・女性の社会進出が起こった(家事労働の減少)

2限目 テーマに関する講義

高度経済成長期についての知識的な背景を押さえる授業を行う。

3限目 トータルな把握とまとめ

ア) 集約できるテーマに基づくトータルな把握

1時間目では総花的に意見が出てきたので2時間目の授業をふまえて集約できるテーマを見つけてそれに基づいて理解の統合をはかる。ここではテーマを「自動車の普及によって世界はどう変わったか」とし、この問題をクラス全体で考えていった。数分間、個人々々での思考の後、一人ずつ意見を言ってもらい、それを黒板に反映する形で授業を進めていった。多くの意

見を板書した後、グルーピングを行い、最終的に 明面 と 暗面 とに分け、光と影の両面からの把握を行った。

イ) レポート作成

最後にこれまでの授業のまとめとして次のようなレポートを課した。

1960年代、日本は高度経済成長をひた走り、暮らしも大きく変わりました。この変化を全体として見渡したとき、日本人は幸せになったと思いますか。不幸せになったと思いますか。自分の考えを書いてください。

生徒のレポートから

(幸せになったと思う)

これについてはこれとしか言いようがないかも知れない。確かに不幸せになったと思う面も多々あるが、それを差し引いても幸せになったと思う。家電製品が普及したことによって、家事は楽になったし、自動車がなければ、今の私はどこにも行けないという感じになってきている。さらに、高度経済成長によって、多分、生まれたときに殺されてしまう赤ん坊が減っただろうから、私は日本人は幸せになったと思う。

(不幸せになったと思う)

家電があふれ都市化が急激に進み各家庭の暮らしは大変便利になり楽にもなりました。しかし、それと同時に人間関係が希薄になっていきました。家族も核家族化が増えていき、田舎に両親を置いていく形態が増えていってしまいました。また、あまりにも急激な経済成長で 公害や環境破壊、過労死など様々な問題が高度経済期の裏には暮らしがよくなったからといって幸せになったわけではないと考えます。

《実践の検証》

資料に様々な生活用品が出てきたりしたので、比較的取り組みやすいテーマであったようである。しかし身近であることが、逆に過去に身を置きその時代に生活していた人々の思考の型に思いをめぐらせる作業をしにくくしてしまった。どうしても、現在の暮らしは良いとする地点から出発し、その前提として高度経済成長を捉える傾向から抜け出せない者が多かった。しかし、高年齢層のみが働く農村風景や公害列島を描いた手塚治虫のイラストから、そうした状況と向き合った人の気持ちを理解しようとする意見も出され、最終的には社会変動のすさまじさを認識し得たようである。資料と正面から向き合い、それを時代全体と関わらせて考える習慣が少しずつ身に付いてきた証かも知れない。

高等学校では、新鮮な資料を生徒に提示し、そこから上がってくる感想や意見、そうしたものをふまえて共通の問題を全体で考えるという作業を行い続けた。その結果、生徒は時代には時代固有のものの考え方や感じ方があることを理解できたと考える。

前近代史での授業実践
【実践校のカリキュラム】

3年次選択科目として日本史B 4単位が設定されている。

【年間学習指導計画上の位置づけ】

	内容
前期	プロローグ：日本史入門 第1章 原始日本の展開 第2章 文明化をめざす古代日本 第3章 王朝国家の諸様相
後期	第4章 公武二重政権の展開 第5章 自力救済の世界 第6章 統一政権下の平和 第7章 近代的世界の黎明

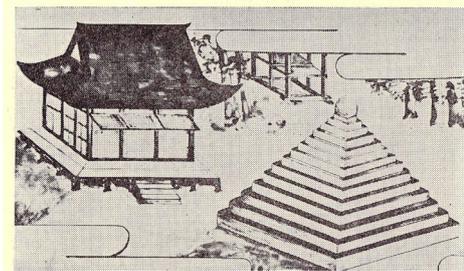
(1) 資料を読み込んで自分の意見をつくる

テーマ「行基が大僧正の位をもらったのは是か否か」

- ・基礎知識の理解，自己意見形成 … 1時間
- ・他者理解，質問，意見修正，討議（1） … 1時間
- ・討議（2），まとめ … 1時間

1時間目

今回の授業の柱を示さずに行基に関する資料を配布し、それぞれどのようなことが言えるかを考えさせた。大野寺土塔の資料に対しては、ピラミッドと答える者が多かったが、お墓ではないかとする者もいた。行基伝説（『日本霊異記』）については生徒に霊能力者のようなイメージがつくられていくのがわかった。行基建立伝説寺院分布図でたくさんの寺院と関連している者ということがわかり、高僧との姿が浮かび上がってきた（10分）。次に行基に関する年表を配付し、それに対する疑問を箇条書きに書かせた。その後、出された疑問に答えていく形で基礎知識を身につけさせる展開とした（10分）。そして、自分で作り上げた行基像をもとにレポートを作成させ、時間終了後提出させた。



大野寺土塔（「行基絵伝」より）（『天平の光と影』講談社）

2時間目

代表的な意見をまとめたプリントを全員に配付し、それを読み質問を考えさせた。その折に今後の段取りを話し、もっとも優れた発言に「ベスト発言賞」が与えられることを述べ、積極的に発言することを促した。質問とそれに対する答えの応酬があり、それを踏まえた上で自分の意見の修正を行わせた。この際、自分の意見が変わった者は申し出させ、それをふまえて討議がなされた。

生徒のレポートから

（肯定派）

行基は仏教を「国」のためではなく「人々」のために説き、活動した。しかし、国からするとそれは法に触れるものであったので弾圧については仕方がないかもしれない。だが、最終的に国から「大僧正の位」を授与されたので国に認められたことになる。

国に認められることは、活動の正当化、規模の拡大をすることにつながるため、位を授与されるのは評価されてもよいと思う。また、「大僧正」という位だけでもあらたに支援してくれるものも増えたのではないか。

（否定派）

政府が、弾圧していた立場から一転して大僧正の位を与えたことは、民衆の支持を得ようとした策略で行基の存在や大僧正という位を与えるということを政治的に利用しているように思う。

納税や兵役など、人々を苦しめている国から位をもらおうということは人々にとっては、行基が国と結ぶことであり、それまでの人々の信頼を裏切ることになると思う。僧尼令によって決まりがあるのであれば、その時点で布教活動から手を引き、国とも交わることなく僧という立場を通すのがその時代の僧としては正しい道だと思う。

3時間目

前回は引き継いで討論を行い、その後、まとめのシートを作成させた。

討論の一部

- (生徒1) 国家に頼らずに活動してきたのに最後になって「大僧正」をもらうというのはいかがなものか。
 (生徒2) 国家に認められるというのは意味のあることでは無いのか。弾圧対象ではなくなることで行基の活動自体が公認されたことになり、民衆への救済は一層やりやすくなったのではないか。また、大僧正の地位ならではのこともできるかもしれない。
 (生徒3) 最初から位をもらおうとの考えがあったのではないか。
 (生徒4) 年表によると国家からの報償を行基が断ったとあるので行基は私利私欲のために活動していたのでは無いと思う。

《実践の検証》

社会は教科書に書いてあることを理解し、記憶し、それをアウトプットする教科との固定観念からか、自分の意見をつくっていくという作業にはとまどいが見えた。しかし、何度か練習めいた作業をしてきており、レポート作りはスムーズにいったように感じられる。ただ、まだまだ一般的なあるべき論からの意見形成が多く、歴史の生命である資料に基づいたレポート作りになっていないのが現状である。

また、討論も非常にぎこちなく、ベスト発言者の表彰などの工夫を試みたが、なかなか自分から発言する雰囲気を生み出すことができなかった。それでも、質問とそれに対する応答の場面では、代表意見をきちんと読み込んだ上での質問やそれに対して瞬時に自分の意見をまとめた上での鋭い切り返しにクラス全体が思わず唸るような光景が見られたりした。また、次第に単なる意見でなく「年表によれば である」といった事実を引用することにより説得的な意見を作り上げていく姿勢が徐々に見えてきたようにも思われる。

そうした意見の積み重ねから、当初、一般論的に行基が国家に認められるのが当然としていた者の中には、意見を揺らがせていった者が多数いた。あるべき論ではなく、具体的な状況の中で考えられるようになってきたのである。また、生徒たち自身でやりとりをする中で、同じく仏教といっても聖武天皇の仏教と行基の仏教では違うのではないかと発言がなされ、そうした発言をふまえて大僧正の位を付与されたことは良かったか否かを考えることができた。行基に関する絵巻の一部分や伝説から入った授業であったが、そこから思考を広げ、農民の様子、国家仏教のあり方や律令国家の様態など、全体と関連づけることで行基の位相を考えようとする姿勢が徐々に育成されてきたと言ってよい。

(2) 資料を見て自分たちで問いを発し、時代像を形作る

テーマ「洛中洛外図屏風から戦国時代の京都を読み解く」

- ・研究テーマの設定 ... 1時間
- ・図書館での調べ学習 ... 1時間
- ・班ごとの発表及び質疑応答 ... 2時間
- ・まとめ、振り返り ... 1時間

事前準備

事前通知：事前に班別で授業を行うことを予告し、班を作って班長を決めておくように指示を出しておく。

1時間目

【指導案】

(評価の観点：関心・意欲・態度、思考・判断、資料活用の技能・表現、知識・理解)

段階	学習内容・学習活動	評価・留意点
導入 10分	洛中洛外図屏風に関する説明 ・名前の由来、「上杉本」をめぐる謎などについて説明する	洛中洛外図屏風をめぐる環境や時代背景について理解する。
展開 35分	資料を見て「モノ」探しをする ・資料を配付する 1) ・「ちょっと、ちょっとこれ見てよ。_____がこんなところに」との発問に応じてできるだけ多く描かれているものを発見する。	資料を見て、できるだけ多くのものを発見する。
	班ごとの発表 ・各班から発表させて、それを板書する。 ・発表された「モノ」をジャンルわけする。	自分たちの見つけたものを総合し、発表することができる。
	謎の発見、答え作り ・モノ探しをふまえて、謎を発見し、その答えを自分なりに考えてみる。	
	グループのテーマ決定 「戦国時代の京都、どうして _____なんだろう」とい	様々な発見された「モノ」をふまえて疑問を定立し、テーマを作り上げる。

	う題で一人3つ以上、謎を発見し、最終的に班で調べていくテーマを決定させる。	
まとめ 5分	発表までの日程・方法説明 ・レポート用紙、報告準備説明文 2)を配布し、これからの日程を説明する。	自分たちが選んだテーマについて、どのように進めていったらいいかを考えることができる。

1) 使用資料について

洛中洛外図屏風は右隻、左隻の計12扇から成り立っている。各生徒に2扇ごと計6枚の白黒コピーを配付し、班ごとにA3版6枚のカラーコピーを配付した。各個人で疑問を持ち、それをカラーコピーで確認するという形で調べてもらおうと考えた。それでもわからない図像が不明瞭である場合にはCD-ROM(『【国宝】上杉本 洛中洛外図屏風大観』小学館)を検索して確かめるといった段取りを取った。

2) 報告準備のために配付した資料は次のようなものである。

報告準備にあたって

1) 発表のスタンス：自分たちの考えたことを発表する。

伝えようとするのは自分の考えであって、感情ではないということだ。

(A) 感情を述べる文

「この前～のコンサートに行ったら、私はすごく感動してしまった」

「ぼくはあの先生は大嫌いだ」

これらは、自分の感情を表明して相手に共感を求める文章といえる。

(B) 考えを述べる文

「～は他のロックとは違う。...というところがぜんぜん違うんだ」

「あの先生のやり方はよくない。だって」というのは不公平じゃないか」

これらは、ある主張を打ち出す(違う、よくない)とともに、「なぜそう言えるか」を説明し、そうすることによって相手を説得しようとする文章といえる。

(西研・森下育彦『「考える」ための小論文』ちくま新書)

2) 資料を集める

・教科書・資料集を利用する

・自分たちの決めたテーマに関する記述や関連しそうな図表を探し出し、理解・分析していく中でテーマをふくらませていく。

・辞典を利用する

・『国史大事典』(吉川弘文館)、『日本史大事典』(平凡社)、『歴史学大事典』(弘文堂)といった事典類の関連項目を引いて理解を深めていく。

・図書室・図書館を利用する

・辞典の最後には参考文献も付されており、そうした中でテーマに関連していそうな書籍にあたって調べる。

3) 自分たちの考えをまとめていく

ノートをとる

・読み流しているだけでは思考は積み重なっていかないので、これは使えると感じた部分についてはノートにとっておく。その時に注意しなければならないのは必ず出典を書いておくこと。どの資料から引用したかがわからないと後で様々なことに支障を来す場合がある。また、ノートをしながらかつてこれは重要だともったことはカードやメモにとっておくことよい。

読んでわからなかったことや、ああそうなんだと思ったことを大切に

・思考していく中で引っかかったことに重要なことが隠されている場合が多い。読んでいたり、考えたりしていく中で自分の心の中に響いたことを大切にすること。

アウトラインをまとめてみる 自分たちの言いたいことは何かを明確化する

・ある程度資料が集まってきたら、そこからなにが言えるかをとりあえずまとめてみる。そこから新たな謎が生まれてきたり、うまく説明できるかどうかの見通しも立ってくる。それを何度か繰り返していく中でしっかりした骨組みの立った“論”が立ってくる。

事実に基づいているかどうかを確かめる

・あくまでも歴史の報告なので想像でものを言っていないか。主張の根拠があるかどうかを点検する。

・どうしたら理解してもらいやすくなるかを考える

・思考することと説明することの間には距離がある。他者に向かって自分たちの意見を伝えるためには文の並べ方や資料の提示の仕方。さまざまな工夫が必要になってくるのでその辺りを検討する。

レジュメを作る

・自分たちの発表する内容のエッセンスを盛り込んだ配付資料を作る。

(実際に生徒に配付した資料は、A4縦のものである)

【生徒達が発見した「モノ」】

サンタのような人がいる / 雲が金 / お坊さんが金儲けをしている / えらい人が運ばれている / 犬の散歩をしている / 羽根突きをしている / 綱引きをしている / 闘鶏 / お笑いのような人がいる / 踊っている人がいる / 御神輿が担がれている / 祭礼を行っている / 相撲を行っている / 稲刈りをしている / 田植えをしている / 僧侶が移動している / 足を開いている / ような不思議なかつこうをした人がいる / キリシタンのような人がいる / 参勤交代(?)のような行列をしている / 武田氏の家紋に似ている紋のついている幕が見える / ショーのように踊りを見せている

【生徒達の発見したテーマ：A組の例】

1班	なぜ漁をしているのか
2班	祇園祭における山車の意義
3班	どうして筏下りが行われているのか
4班	なぜ山車が船なのか
5班	どうして四季が描かれているのか
6班	戦国時代なのにどうして京都は栄えているように見えるのか



図書室で調べる
地歴公民-1-9

2時間目

- ・図書館での調べ学習。班毎にテーマをめぐって語りながら、調べるべき項目を考える。
- ・調べ方の手引きを見て、国史大事典から調べ始めるなど実際の調査活動を行う。

3・4時間目

発表日前日までにレジュメを提出させておく。

【レジュメの一例】

疑問：なぜ戦国時代に祇園祭を開催することができたのか？

【人口】 武士達による戦いが主だったので人々が戦いに出ることがなかったと思う。先にも述べたように町衆が主に行っており、町衆がいたので祭りを開催することができた。

【結論】 戦国時代には冬に行われたこともあるそうです。祭りは行われ続けたのか場所が天皇の力で守られ、人々が戦うことがなく祭りが行えたからである。

京都という場所
【中世】大名たちは京都を手中に入れようとは思わなかったようだ。天皇がいたからだった。天皇に力があつたおかげで、京都は他者の支配下にならずに済んだのである。このことにより、祇園祭は今につながっているというわけだ。

京の町に主立った戦いはない

京都

戦国大名 征夷大将軍になりたいので全国統一めざす

戦国

主寺院関係の人たちによって

主に町衆達の力でやるようになった

自分たちはこの疑問をみつけた。戦国時代といえは大名達によって領土拡大、全国統一の時代の時代でもあった。加えて、民衆も戦場に行き、京都も戦場になつていたはずなのに。そこで、この問題を調べてみた。

この祭りは平安時代の「御霊会」に端を発し、今に至っている約千年の歴史を持った祭りとして有名だ。元々は疫病や災いの供養のためにされるようになったものが、様々な変化をして神輿を引くような雄壮なものとなつていった。

平安時代

僧達にお任せ

町衆が盛り上げていった

心仁の乱

町衆

このようにして、京の町では毎年、夏になると祇園祭が行われます。戦国時代には冬に行われたこともあるそうです。

ア) 評価シート、質問シートを配付し、評価の基準について説明する。

評価シートについて

- ・ 5項目の各観点から評価を行う
 - A：資料をうまく使えているか。 B：戦国時代の京都を浮かび上がらせることができたか。 C：説明はわかりやすかったか。 D：説明は論理的であったか。 E：質問に対してしっかり答えることができたか。
- ・ 各項目は5点。25点満点で各班の採点を行う。
- ・ 評価シートには聞きながらメモをすることのできるメモをとれるスペースをとっておく。

イ) 前日までに提出されたレジュメを人数分印刷しておき、配付する。

- ウ) 発表時間は最大8分。発表後、質問を受け付け、答えられなかったものは後日答えるというルールを説明する。
- エ) 1班から順番に発表する。
- オ) 発表後、聞き手は評価シートに点数を書き込む。
- カ) 質疑応答。終了後、次の班の発表へと移る。

5時間目

- ア) 各班から前回答えられなかった質問に対応する。
- イ) 各班から最後に言っておきたいことを述べさせる(各班3分以内)
- ウ) いままで勉強したことを振り返って感想を書かせる。また、メッセージカードを配り、一番印象に残った班に対してコメントを書かせた。その間に結果集計を行う
- エ) 結果発表、教員による総括を行う。



発表風景

生徒の感想より

・川での漁業というあまり大きなテーマではありませんでしたが、こんな小さな事でも歴史はあり、非常に興味深かったです。(中略)桂女の仕事や、漁業の歴史を調べるのは少し大変だったけど、自分にとって大きな価値があるものになりました。

・昔の人にもいろいろな人がいた。『洛中洛外図屏風』に描かれた人一人一人に意味があると思う。もし、今の日本の町が描かれた絵があったとして、描かれた全ての人がなにをしているのかという意味を持っているように描けるだろうか？昔の人はそれほどに日々ちゃんと生きていたんだろうと思った。

・戦国というと戦っているイメージしかなかったけれど、祭りもあるし、人はちゃんと生活しているし、暮らしが見えた気がします。(中略)この絵についての知識をもっと持ってからその中のことに取り組みたかった。

実践の検証

洛中洛外図屏風には多くの生徒が見入っていた。遠い過去の大パノラマに圧倒された感があった。しかし、圧倒されすぎてしまい目移りして焦点を合わせられず、何が描かれているかを考え始めるまでに多くの時間を要してしまった。その成果は思わぬ所に思わぬ「モノ」を発見するところにつながっていったものの、そのためにテーマを考える時間が足りなくなってしまう、よく考えた上で決定とは到底思えないテーマも出てきてしまったことも事実である。屏風を一目見たとき、全ての者の目を引く山車からとりあえず入ってしまおうとする班が多く、最初に発見したさまざまな「モノ」があまり活かされなかったのは残念である。

2時間目は、図書館で調べ学習を行った。不慣れながらも調べの手引きなどをたよりに少しずつ調査を進めていった。中には関連書籍をひっくり返しながらか考察を深めていったものもいた。インターネットの利用については、調べたい事項が明確になっていない場合には徒労に終わることが多かった。

3・4時間目では各班ごとに自分たちの調べてきたことを基に発表をしてもらった。ほとんどの班が自分たちのテーマについて戦国時代の京都に思いをはせつつ調べてきたことを熱心に報告することができた。資料も教科書、資料集を始め、コピー資料の場所提示も堂々で行えた。課題は、集めた資料を並べてみて、そこから自分たちの課題にそって自分たちの考えをまとめていくことができるようにすることである。質問については友人への気兼ねからなかなか出なかったが、中には勇気をふるって質問する者もいた。

5時間目の答えられなかった質問への応答であるが、京都の郷土資料館に電話をするなど、努力の跡が見られた。最後のPRでは他班の発表をふまえた上で自分たちのテーマをとらえ返し、自分たちの報告をまとめる姿が見られた。

教員側の反省

一度、資料を丸ごと見せたいとの願望から出発したが、洛中洛外図屏風は資料的にあまりに「巨大」すぎて生徒に全体を提示するのは無理があったことを痛感した。やはり、一部分を共通で見ることが適当であったのではないかと思う。また、1時間目は屏風図を見ている時間にかなりの部分が割かれ、それ以外の内容がおざなりになりがちになってしまった。予定ではウォーミングアップとして、生徒たちから出てきた質問のいくつかを全体で行う予定だったにも拘らず数分しかとれなかった。そのことが、テーマ決めにも少なからず影響したと考えている。こうした授業を行う場合、「仕込み」段階が非常に重要であることを改めて実感させられた。また、レジュメ作成から発表まで生徒に任せきりにしたことも、生徒が探求型の授業に不慣れであるにも拘らず、バックアップが手薄であったと感じる。中間報告として一度教員に見させるなど生徒に任せるところと教員が手をかけるところのバランスを再考したい。

7 まとめ

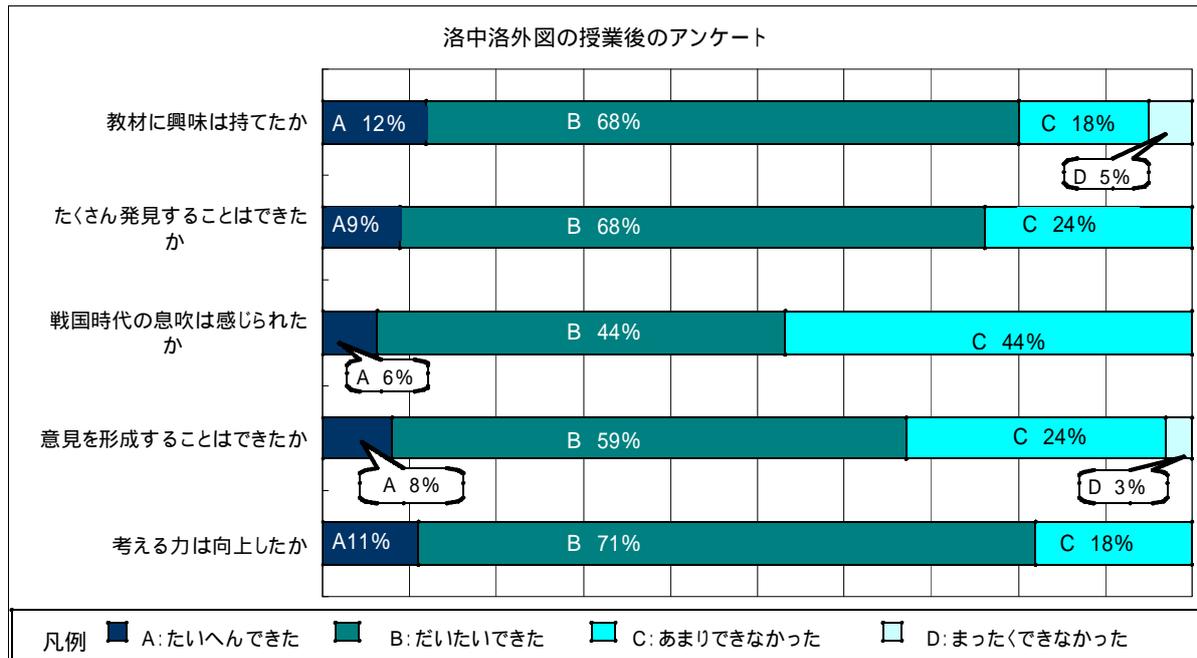
図像資料としての洛中洛外図屏風の存在感は、やはり圧倒的である。洛中洛外図屏風の授業実践後に行ったアンケートでも興味を持てたと答えた者が大多数を占めている。しかも、資料と向き合って自分なりに新たな発見が出来たかとの問いにも多くの者が発見できたと答えてくれた結果を見るにつけ、改めて資料の持っている力を認識させられた感がある。

発表の準備についてもリーダーを中心として、自分たちで時間を見つけて進めていくことができた。手持ちの資料や図書室を利用し、自分たちの設定したテーマについて少しずつ思考を積み重ねていくことができた。

しかし、問題はその先にある。授業の最終目標は、資料を目にした生徒がその世界と出会い、自分自身の問題意識と交錯させつつ問題点を見出し、自分なりにその答えを見出していける力を養うことにあった。その上で自分なりの時代像を浮かび上がらせることができるかどうかにあった。残念ながらそうした醍醐味を洛中洛外図屏風を通じた授業では生徒達に味わせられなかったようである。アンケート結果では、「戦国時代の息吹を感じられたか」との問いに対して奇しくも意見は五分五分に分かれたのである。祭りのにぎわいや「モノ」を売る商人の姿は思い浮かべることができても、それらを総合して戦国時代の京都像を総合的に紡ぎ出させるまでには至らせることができなかったのではないか。

しかし、洛中洛外図屏風に対する違和感、すなわち、戦国時代なのにどうしてこんなに活気を

呈しているのか、という違和感は共有された。今後はこの疑問点を触媒として時代像を構築するための指導方法の検討が課題である。



一つの突破口は問う力をもっと養わせていくことにある。洛中洛外図屏風以前の授業では資料を見る視点は教員から与えられ、それを解くという力を生徒たちは培ってきた。それに対し、今回は自分自身で問いを発見する地点から始めなければならなかったのである。“問いを発見する”という力は教員が思うより遥かに難しい力であった。口すっぱく「なぜ なんだらう」という謎かけの形式に問題を作っていこうとの指示を行ったにも拘らず、調べていく中で「 について」という形に変容していき、かき集めた知識を手際よく整序し、説明することで終わってしまった班が多かったからである。素朴な疑問を大切に、それを調べていくことのおもしろさをこれからも生徒達に発していく必要性を痛感した授業であった。

以上、全体の検証も洛中洛外図屏風の授業を中心に述べてきたが、一連の授業を通じてわかったことは、まず新鮮な資料に対して生徒は目を輝かせて見てくれるということである。不可思議な絵や物語を前にして知的好奇心は作動し出すのである。資料を見て、「この絵から発見できるものはなんだらう」といった類の設定問に対しては実に生き生きと答えてくれることも改めて確認した。そして、謎が解かれていく過程についても興味をもって取り組んでいる生徒が多い。発せられた問いに対していくつもの“答え”が出て、どちらの方に妥当性があるのかを考えることに対して興味を見せるようになってきている。このように社会史的な資料を使用したり、問題を生徒に投げかけることで生徒たちは過去に思いをはせ、自分たちとは異なるが確かに人間であったと見るようになってきている。それは、すなわち、授業に能動的に参加する姿勢が高まってきていることを意味している。生徒たちは次第に資料を見て感じ、考える作業を繰り返す中で自ら問う力が養われてきている。やがて、自分で資料を見て、資料に問う力を身につけ活用できるよう、社会史的な観点からの考察を続けていきたい。

8 おわりに

資料を見て、意見を発表し合うことから出発する授業は 高等学校の生徒たちには未体験のものであり、自分の行ってきたことが当たり前ではないことを知らされた。答えが出ていない問題があるということについても意外な感を持ったようである。しかし、生徒たちの適応力はとても速かった。最初はとまどいを見せた一つの事柄についていくつもの見方があるという事にはすっかり慣れ、自分の意見も苦しみながらも作成するようになってきている。最後の目標は過去に生きていた人々を自分なりに生き生きと感じてもらうことである。異なった時代に生きていた人々の営みを追体験することで現代を相対化し、未来を切り開いていく糧とすることが、歴史を学ぶことだからである。その一貫として行った洛中洛外図屏風の授業後、「今から始めたらくさんの問いを発見することができるのに」との声を何人もの生徒から聞かされた。明らかに資料に取り組む姿勢もより積極的になったきた。そうした生徒の成長する力を信じてこれからも新しい歴史像を提供していきたい。

最後に、遅々と進めぬ原稿作成に対してねばり強く指導し続けていただいた指導課ならびに教科指導員の先生方に、心から感謝を申し上げます。